

演題名：医工学と補完代替医療の接面

発表者名：阿岸鉄三（あぎしてつぞう）

所属：板橋中央総合病院血液浄化療法センター

連絡先：〒174-0051 東京都板橋区小豆沢 2 - 14 - 7 板橋中央総合病院
血液浄化療法センター TEL&FAX;03-5915-2775 e-mail ;
tetags15327@yahoo.co.jp

医工学は、医療先進国において発達した医学と工学との融合的領域 multidisciplinary field に対して与えられた概念であり、医学を科学専一的に見ようとする。補完代替医療は現代では地球上の80%に及ぶ人口に適用されているが、必ずしも現代科学的には理解されない、すなわち非科学医療である。両者の関係を考えるときのキーワードのひとつは、‘科学’である。原理主義的に極論すれば、科学の特性としての排他的思考傾向にしたがうと、両者の接面はないはずである。ところが現実に利用されている医工学と補完代替医療との間には接面が存在する。それには、3つの要因を考えることができる。第1は、“科学的” “科学性”などは通常極めて厳格な定義を持っているように考えるが、実際には、不明確・曖昧・いい加減に使用されている現代科学のもつ緩やかな本性が、補完代替医療の入り込む隙を許しているのである。第2には、補完代替医療が現代社会で臨床応用されるとき、“科学的らしさ”を装わなければならないことにある。第3には、科学に対する評価の変容が考えられる。かつて、科学的であることが絶対的な価値を持ち、真理の象徴とさえ考えられたが、現代ではその評価が揺らぎつつある。両者の接面をより大きくすることに対する最大の難関は、補完代替医療においては施療者と被施療者間の感性の交流を重視するのに対して、科学的医療においてはそれを非科学的として否定する傾向にあることであろう。ロボットは、現代医工学の粋を凝らしたものであるが、補完代替医療の重要な特性である感性・感情・精神・霊性を備えていない。ある種の人工臓器に見られるような生命を持った生物学的要素を利用しなければ、純機械的なロボットでは純粋な意味で補完代替医療には踏み込むことができないのではないか。Transdisciplinaryな立場から感性そのものを科学的に理解・説明できるようになるか、あるいは、精神作用を“先行的了解事項”として科学的楔を済ませることによって両者の広い交流が可能になると考えられる。

